

北海道オホーツク管内における ミヤマシトド *Zonotrichia leucophrys* の初観察と越冬記録

ダグラス・ブラート^{1,2*}・城石一徹¹

1. 日本野鳥の会オホーツク支部 2. 知床博物館協力会

Record of an overwintering White-crowned Sparrow *Zonotrichia leucophrys* during its first recorded appearance in Okhotsk Subprefecture, Hokkaido, northern Japan

BRAAT Douglas^{1,2*}, SHIROISHI Ittetsu¹

*✉ nrp34702@nifty.com

Zonotrichia leucophrys in 1st winter plumage and changing to adult plumage was observed at a single location in Abashiri City, Okhotsk Subprefecture, Hokkaido, Japan, from 30 December 2022 to 24 April 2023. This is the first report of this species in Okhotsk Subprefecture and while overwintering in Hokkaido.

Keywords *Zonotrichia leucophrys*, white-crowned sparrow, first record, overwintering, Hokkaido

はじめに

ミヤマシトド *Zonotrichia leucophrys* は、通常、アラスカやカナダで繁殖し、アメリカ南部やメキシコなどで越冬するミヤマシトド属 *Zonotrichia* の鳥である (日本鳥学会 2012)。日本での観察例は極めて少なく、迷鳥 (accidental visitor, vagrant) として渡来する (日本鳥学会 2012, Brazil 2018)。北海道内における本種の記録は、1969年3月と1975年2月に別海町 (高野 1982, 高田 1991)、2011年5月に利尻島 (田牧 2012) で報告されているほか、2022年4月に札幌市 (YouTube チャンネル「技研工房」, <https://www.youtube.com/watch?v=ogtqxwJ2FNA>, 2023年10月19日閲覧) における観察例がある。筆者は2022年12月30日に、北海道網走市内において本種1羽を確認し、2023年4月24日までの間、同一個体と思われる本種を継続的に観察した。これまで本種のオホーツク総合振興局管内 (以下、オホーツク管内) における観察記録は報告されておらず、また北海道内において本種の確実な越冬記録は報告されていないため、ここに報告する。なお、本報告に記載する各鳥類の学名と和名については、「日本鳥類目録、改訂7版」(日本鳥学会 2012) に準拠した。

観察環境

観察地周辺の環境は、網走市内にある樹高約35mのアカエゾマツ *Picea glehnii* の植栽林とその近傍に樹高約6mのヒメリンゴ *Malus prunifolia* が1本植栽されている環境だった (図1; 私有地に付き、詳細を省略する)。また観察地にほど近い住宅の庭にはカエデ類やサクラ類などの落葉樹があり、観察地から100-150mほど南側には、アカエゾマツと同等の高さの常緑針葉樹の並木があった。ヒメリンゴの木には2種類の餌台が各2基、計4基が設置されており、各餌台の間隔は1-2m程度だった。餌台の種類は一つが筒状のもの (直径8

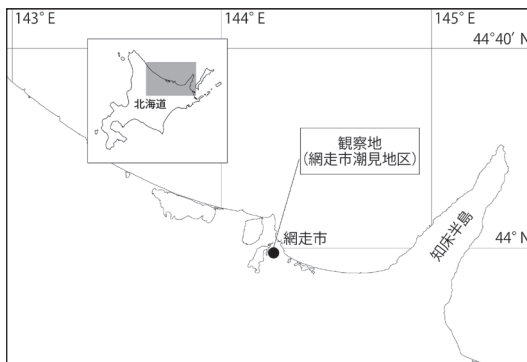


図1. 観察地点位置図

cm × 高さ 19 cm, 地上から 1.3 m と 1.5 m), もう一方は屋根が付いた木造のものであった (幅 20 cm × 奥行 20 cm × 高さ 27 cm, 地上から 1.5 m および幅 20 cm × 奥行 16 cm × 高さ 23 cm, 地上から 90 cm). 筒状の餌台にはヒマワリの種が入っていて, 屋根付きの餌台に市販の野鳥用の配合飼料が入っていた. この商品のラベルに, 使用原料は「ミレット, キビ, 小粒ヒマワリ, ヒエ, サフラワー, 割トウモロコシ, ソバ, カナリヤシード, マイロ, 麻の実, 小麦, ムキオーツの麦」が配合とされているが, 「原材料事情により, 一部変更する場合があります」と記載されていた. この環境がたまたまあったものだが, 本個体はこの環境で越冬することとなった.

観察方法

本種の観察は肉眼または双眼鏡を用いて行い, 撮影には 70-200mm の望遠レンズを装着したデジタル一眼レフカメラを使用した. 本種の滞在期間中は 1 日 1 回から最大 12 回の観察を行ない, 各観察時間は数秒から 30 分以上に及んだ. 本個体の滞在時間帯と行動などを記録した.

観察記録

筆者が本種を初めて観察したのは 2022 年 12 月 30 日だった. 筆者にとって見慣れない鳥であったため, 本個体を撮影した後に, 通常参考としている北海道の野鳥図鑑を用いて同定を試みたが, 本個体に該当する個体の写真が掲載されていなかったため, 「日本の野鳥 (山と溪谷社 2014)」を用いて照合した. 撮影された本個体 (図 2) は黄色の嘴を持ち, 頭部から胸部にかけて灰褐色味を帯びていて, また, 褐色の頭側線と過眼線と淡い灰褐色の眉斑を有し, 頭中央線も灰褐色だった. 2023 年 4 月 7 日頃から, 頭部が換羽していく様子が見られ, 頭中央線及び眉斑の羽毛が白色へ換羽し, 頭側線も黒色の羽毛へ換羽し, 背上面は褐色で, 黒色の縦斑があった (図 3-4). また, 大雨覆及び中雨覆の羽縁は白色で, 腰は淡褐色だった. 以上の特徴から本個体をミヤマシトドと同定した. 本個体の年齢について検証したところ, ミヤマシトドの第一回冬羽では褐色の頭側線, 灰褐色の頭中央線及び眉斑を有し, 第一回夏羽以降の個体では黒色の頭側線, 白色の頭中央線及び眉斑を有することが本種で



図 2. 観察された第一回冬羽のミヤマシトド, 2022 年 12 月 30 日, ダグラス・ブラート撮影.



図3. 第一回夏羽移行中の同一個体, 2023年4月7日, ダグラス・プラート撮影.



図4. 第一回夏羽移行後の同一個体, 2023年4月23日, ダグラス・プラート撮影.

はよく知られている(図4)。上記の本個体の換羽状況と照らし合わせ、本個体の初観察時の齢を第一回冬羽とした。

本種は初観察された日から2023年4月24日までの滞在期間中はほぼ毎日観察された。観察期間中に本種の他に観察地へ飛来した鳥類は22種を確認し、本個体と他の鳥類との関係性を検証するために飛来した鳥類を4つのグループに整理した(表1)。毎日もしくはほぼ毎日飛来した種を3つのグループにした：(1)全期間に及ぶ飛来種(主にカラ類5種：シジュウカラ *Parus minor*、ヤマガラ *Poecile varius*、ハシブトガラ *Poecile palustris*、コガラ *Poecile motanus*、ゴジュウカラ *Sitta europaea* およびシメ *Coccothraustes coccothraustes* とヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis* 等)、(2)冬季のみの飛来種(ツグミ *Turdus naumanni*、カケス *Garrulus glandarius*、エナガ *Aegithalos caudatus*、アトリ *Fringilla montifringilla* 等)と、(3)春先の期間中の飛来種(カワラヒワ *Chloris sinica* とキジバト *Streptopelia orientalis*)。ここで示す「冬期間」は雪解けが目立ち始める3月上旬まで、「春先」とは本個体の滞在記録が途絶える4月24日までとする。全期間中、稀に飛来した種(アオジ *Emberiza spodocephala*、ヒガラ *Periparus ater* 等)を表1のグループ4にまとめた。鳥類以外では、筒形の餌台や地面にあったヒマワリの種を食べに来たエゾリス *Sciurus vulgaris orientis* 2-4匹も期間を通じて毎日観察された。

初確認日である12月30日から1月3日までは、本個体はアオジと同時に観察されることが多かった(期間中の40%;表2)。本個体はアオジと共にヒメリンゴに留まったり、共に地上で採餌する様子が見られたため、多くの時間をアオジと行動を共にしていることが示唆された。

次いで、1月4日から同月13日までは、アオジの確認が一時途絶えたためか、アオジに代わって本個体と同時に観察された種はスズメであった(全体の22%;表2)。スズメは1月3日まで毎日飛来していたが、本個体と同時に観察されることはなかった。1月4日と同月6日の間、本個体はスズメと同時に観察されたことがもっとも多く(32%;表2)、スズメが頻繁に採餌する餌台で本個体も5日に初めて餌台で採餌している様子が観察された。1月5日と同月6日、本個体とスズメは共に餌台で採餌する場面が数回見られた。1月7日

には本個体が採餌をしたりヒメリンゴの木に留まったりした後、木の上にあるアカエゾマツの枝へ飛翔する場面が初めて観察された。この行動は同所で観察されるカラ類で頻繁に見られる行動だった。1月11日から同月13日までは、スズメと一緒にいる頻度が平均5%まで減少した(表2)。1月14日から27日の間はスズメの確認が一時途絶えたが、その間、本個体はもっぱら上記のパターンにおいて単独で行動していた。

1月28日、同月31日と2月2日に、再度スズメを確認したが、本個体と一緒にいたのは2月2日のみで、本個体はスズメと共に地上で採餌していた際に、スズメを2回ほど追いかける様子が観察された(表2)。

2月22日から同月27日まで、アオジが再び確認されたが、本個体と一緒にいる頻度が以前より大幅に減った(表2)。この期間のアオジの観察数は、29回だったが、本個体が近くにいた回数は3回のみで、同月23日の朝、ヒメリンゴの木の下で採餌中のアオジを本個体が追いかける行動が2回確認された(表2)。

3月5日までは、本個体が毎日確認されたが、3月6日から同月26日までは、確認頻度が急に減り4回のみであった。この時期は雪解けが進み、3月5日から同月8日まで晴天が続き、日中の気温は10°C程度まで上昇した。3月7日の夜は満月だったこともあり、これらの要因が本個体の行動パターンに何らかの変化を及ぼした可能性も考えられたが、はっきりとした理由は不明である。本個体は3月9日に、4日ぶりに観察地で再度確認されたが、3月10日から同月26日まで、3回しか確認できなかった(3月16~17日と同月20日)。3月27日からは確認頻度がまた増え、最終確認日の4月24日までは、ほぼ毎日観察されたことから、確認頻度が低くなった時期にも大きく移動せず、近くには滞在していたものと思われた。

本個体は、前述の行動以外にも、周辺を見回しつつ、数分から最大25分程度、枝条に留まる行動がしばしば見られた。採餌中の時と同様に、この時にカラ類が近くにやってくるような様子は見られなかった。

本個体と他種間との関係を観察したところ、異種間に起こる採餌場からの排除や餌の奪い合いなどの行動が見られたが少なかった。一方でカラ類などでは同種間または異種間での排他的行動が頻繁に確認された。

考察

日本に飛来するミヤマシトドは、亜種 *Z. l. gambelii* とされている (日本鳥学会 2012; Brazil 2018). 本亜種は他の亜種よりも日本に近いアラスカやカナダ北部で繁殖することが知られている。8月頃に繁殖地から越冬地へ向けた渡りを開始し、北米西海岸の内陸ルートを經由し数千キロを辿って、約60日間で越冬地のアメリカ南西部などへ渡る (DeWolfe 1968). 同じく DeWolfe (1968) によれば、本亜種が越冬地へ渡る距離が約4,000 km, 飛翔速度が約32 km/h, 1日65km (つまり約2時間程度) 飛ぶと仮定した場合、多くの時間を休息や採餌に費やすことで、越冬地から繁殖地への渡りに要する期間は約35日間よりも多くの日数を要すると報告されている、また、未成鳥の個体も成鳥と同じように渡りを行うことができるとされている。

1936年に本種が日本国内で初めて記録されて以来 (岡 1972; 日本鳥学会 2012), これまでに25回ほどの記録がある (表3). 国内における本種の記録の多くは、第一回冬羽であると考えられる。成鳥は本来の渡来経路とは逆方向の日本まで迷行する可能性は低いと思われるが、本個体のように日本で最初の冬を過ごした第一回冬羽の個体が本来の繁殖地へ戻った場合、再び越冬するために日本へ渡来するかについては不明である (2024年3月中旬現在、昨年の本観察地で、本種の再確認は無い)。

本個体が観察地へ迷行した経緯については、上記した本亜種の渡りの特性上、アラスカやカナダ北部の繁殖地を飛び立ち、アリューシャン列島から千島列島またはサハリンを経由して北海道へ渡来したことが推測される。IUCNの報告で本種は、ロシアの東部においても迷鳥とされている (<https://www.iucnredlist.org/species/22721088/136821496>, 2023年10月19日閲覧). 根室海峡から近い別海町において、過去2回の観察記録があったことから、本種が千島列島を経由して渡来して来た可能性が示唆される。一方で、利尻島や札幌への渡来は、大陸側またはサハリン経由で飛来した可能性も考えられる。オホーツク管内への渡来については、地理的観点から北海道内陸またはオホーツク海岸沿いを經由した双方の可能性が考えられるため、千島列島もしくは

サハリン経由のいずれかのルートの可能性があると考えられる。

別海町の2回の観察は、いずれも2-3月だったが、年齢に関する明確な記録が確認できていない。利尻島と札幌市の観察は、いずれも4-5月で、成鳥として記録されている (利尻: 田牧 2012; 札幌: <https://www.youtube.com/watch?v=ogtqxwJ2FNA>, 2023年10月23日閲覧) が、飛来時に第一回冬羽か成鳥であったかは不明である。

2017年に埼玉県の大久保農耕地で越冬したミヤマシトド成鳥のさえずり音声があった: <https://www.youtube.com/watch?v=rPbjdm06bWk> (佐藤ら, 2017; 2023年10月23日閲覧). 動画では本種は囀っていることから、この個体が雄と推測されるが、本観察個体は鳴き声の確認ができなかったため、性別は不明とした。

観察地の本個体と他種との関係に、特徴的な関係性が観られなかったが、札幌市の観察場面の餌台で撮られた動画では、本観察地で観られた本個体と他種の関係性に類似しており、札幌市で撮影された動画では主に3-4羽のアトリとミヤマシトドが干渉し合う様子もなく共に採餌していた (<https://www.youtube.com/watch?v=ogtqxwJ2FNA>, 2023年10月23日閲覧)。

本個体の滞在の最後の6週間 (3月7日から4月24日まで) のパターンを確認したところ、雪解けが進行したタイミングにもなっているが、3月6日から同月26日までの21日間に、4回 (19%) しか観察できなかった。これに対し、3月27日から4月24日までの27日間では22回 (81%) 本個体が確認できた。4月17日には観察全期間で最多となる12回の観察が記録された。本亜種は渡り前に、3-5日間で脂肪を蓄え体重を最大限に増加させることができると報告されている (King 1961). したがって本個体が観察終盤に多数観察できたのは、渡るための栄養を備える活動に集中していたためと推察できる。

本亜種の本来の越冬地であるアメリカ南西部やメキシコは、降雪が極めて少ない地域であるが、本事例のように雪が多い地域であつても、餌が十分に確保できていれば無事に越冬でき、換羽も順調に進むものと思われた。今後も日本における本種の観察記録に注目したい。

表1. 全期間に於ける野鳥の確認頻度と平均個体数、頻度は、各期間中の合計日数の内に観察があった日数の比率：A = 100%~76%, B = 75%~51%, C = 50%~26%, D = 25%~1%, 「-」=観察がなかった。平均数は、各期間中の1日あたりに同時に観察した一番多い数の平均；観察がなかった日数は、平均計算に含まれていない。ミヤマシトドについては、頻度計算はせず、各期間中の観察回数を示す。学名と和名は、日本鳥類目録の改訂7版(日本鳥学会 2012)に準拠した。

No.	種名	Dec. 28-31		Jan. 1-15		Jan. 16-31		Feb. 1-14		Feb. 15-28		Mar. 1-15		Mar. 16-31		Apr. 1-13		Apr. 15-19 22-24	
		4日間 頻度	平均数	15日間 頻度	平均数	16日間 頻度	平均数	14日間 頻度	平均数	14日間 頻度	平均数	15日間 頻度	平均数	16日間 頻度	平均数	13日間 頻度	平均数	8日間 頻度	平均数
グループ1：全期間、毎日とほぼ毎日																			
1	ミヤマシトド <i>Zonotrichia leucophrys</i>	3/4	1.0	15/15	1.0	16/16	1.0	14/14	1.0	14/14	1.0	6/15	1.0	7/16	1.0	11/13	1.0	7/8	1.0
2	シジュウカラ <i>Parus minor</i>	A	5.0	A	5.0	A	5.3	A	6.8	A	6.8	A	6.8	A	2.9	A	2.9	A	3.3
3	ヤマガラ <i>Poecile varius</i>	A	3.3	A	2.7	A	2.1	A	2.3	A	2.3	A	2.3	A	1.8	A	2.1	A	1.6
4	ハシブトガラ <i>Poecile palustris</i>	A	3.0	A	2.2	A	2.1	A	2.1	A	2.1	A	2.1	A	1.9	A	2.3	A	1.9
5	コガラ <i>Poecile montanus</i>	A	1.0	A	1.0	A	1.0	A	1.1	A	1.1	A	1.1	C	1.0	A	1.1	C	1.0
6	ゴジュウカラ <i>Sitta europaea</i>	A	2.0	A	2.1	A	1.9	A	2.0	A	1.9	A	1.5	A	2.0	A	1.8	A	1.0
7	シメ <i>Coccothraustes coccolbraustes</i>	-	-	A	1.7	C	1.0	A	1.0	B	1.0	B	1.0	C	1.2	C	1.0	C	1.0
8	ヒヨドリ <i>Hypspetes amaurotis</i>	B	2.5	D	1.8	A	1.8	A	2.0	A	1.2	A	1.5	A	1.1	A	1.7	A	1.7
9	アカゲラ <i>Dendrocopos major</i>	A	1.0	A	1.9	A	1.3	A	1.8	A	1.5	A	1.7	A	1.1	A	1.0	A	1.0
10	コゲラ <i>Dendrocopos kizuki</i>	C	1.0	A	1.1	B	1.0	A	1.0	A	1.2	A	1.3	A	1.4	A	1.6	A	1.4
グループ2：冬季期間																			
11	スズメ <i>Passer montanus</i>	A	1.3	B	1.2	D	1.0	D	1.0	D	1.0	-	-	-	-	-	-	-	-
12	ツグミ <i>Turdus naumanni</i>	C	1.0	A	1.0	C	1.0	A	1.0	A	1.3	A	1.1	D	1.0	-	-	-	-
13	カケス <i>Garrulus glandarius</i>	B	1.0	A	2.9	A	3.0	A	3.9	A	3.7	B	3.0	C	2.0	-	-	-	-

表 1. 続き.

No.	種名	Dec. 28-31		Jan. 1-15		Jan. 16-31		Feb. 1-14		Feb. 15-28		Mar. 1-15		Mar. 16-31		Apr. 1-13		Apr. 15-19 22-24		
		4日間 頻度	平均数	15日間 頻度	平均数	16日間 頻度	平均数	14日間 頻度	平均数	14日間 頻度	平均数	14日間 頻度	平均数	15日間 頻度	平均数	16日間 頻度	平均数	13日間 頻度	平均数	8日間 頻度
14	ミノサザイ <i>Troglodytes troglodytes</i>	-	-	C	1.0	D	1.0	D	1.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
15	エナガ <i>Aegithalos caudatus</i>	-	-	C	9.5	C	9.2	B	5.0	A	4.5	B	2.2	C	2.0	D	1.7	-	-	-
16	アトリ <i>Fringilla montifringilla</i>	-	-	-	-	D	1.3	B	1.2	B	1.0	C	1.0	D	4.0	-	-	-	-	-
グループ 3：春先期間																				
17	カワラヒワ <i>Chloris sinica</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	D	1.0	C	1.7	B	2.2	A	1.5	A	2.0	-
18	キジバト <i>Streptopelia orientalis</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	C	1.9	C	1.3	A	2.1	-
グループ 4：全期間、頻度少数																				
19	アオジ <i>Emberiza spodocephala</i>	B	1.7	D	1.0	-	-	-	-	C	1.0	D	1.0	-	-	-	-	-	C	1.0
20	ヒガラ <i>Periparus ater</i>	C	1.0	D	1.0	D	1.0	C	1.2	C	1.0	D	1.0	C	1.0	C	1.8	A	1.3	-
21	ハイタカ <i>Accipiter nisus</i>	-	-	D	1.0	-	-	-	-	-	-	D	1.0	-	-	-	-	-	-	-
22	カラス類	-	-	D	1.0	D	1.5	C	1.7	D	1.5	C	1.6	D	1.5	D	1.0	B	1.0	-

表2. ミヤマシトドのアオジ・スズメとの行動観察記録。「本個体」の観察回数は、アオジもしくはスズメが同時にいてもカウントした回数。「同時観察」とは、アオジもしくはスズメが本個体の近く(約80 cm以内)にいる場合が観察された回数を示す。「4+」とはスズメ/アオジの詳細な観察回数は記録されていないが、期間中4回以上は確実に観察されていたことを示す。「木」とは観察現場にあるヒメリンゴの木で、「松の枝」とはヒメリンゴの木の上部にあるアカエゾマツの枝のこと。「餌台」はヒメリンゴの木に設置しているものである。

期間	アオジ/ スズメの観察		観察回数		同時観察比率 (頻度)	行動・備考
	アオジ	スズメ	アオジ/スズメのみ	本個体		
2022年12月30日 ～2023年1月3日	アオジ1羽 スズメ1羽	1 4+	15 6	6 0	40% 0%	地面で採餌、木に留まっている。アオジも主に地面で採餌。アオジは1月4日～2月21日まで見ない。
2023年1月4日	スズメ1羽	記録なし	5	1	20%	15:29-54 (夕暮れ中)：長く一緒に木に留まっていた。
2023年1月5日	スズメ1羽	記録なし	10	3	30%	15:30-35: 餌台での採餌の初観察。一時、スズメと一緒に採餌。
2023年1月6日	スズメ1羽	1	7	3	43%	午前と午後、本日2回一緒に餌台で採餌。飛んでいく時もスズメに付いて行く。
2023年1月7日	スズメ1羽	3	3	0	0%	15:20: 木の上にある松の枝への飛翔の初観察。
2023年1月8日	スズメ2羽	0	6	2	33%	2回とも、雪の上のスズメ2羽と一緒に採餌。
2023年1月9日	スズメ1羽	4	4	0	0%	本個体は木の下で地面と雪の上に採餌、松の枝への飛翔の繰り返し。
2023年1月10日	スズメ1羽	0	9	2	22%	9:53: 両種は松の枝で留まり、14:53-15:01：3分間、餌台と一緒に採餌。
2023年1月11日	不在	0	9	0	0%	単独行動：地面や餌台で採餌、じっと木に留まったり、松の枝への飛翔の繰り返し。
2023年1月12日	スズメ1羽	0	5	1	20%	15:54-58: スズメは餌台で採餌、本個体は近くで木に留まっていた。
2023年1月13日	スズメ1羽	4	5	0	0%	本個体は地面や雪で採餌、木に留まり；スズメも同行動だが、一緒ではない。
2023年1月14日 ～2023年1月27日	不在	0	多数	0	0%	27日までスズメの観察がなかった。本個体は単独で行動する。
2023年1月28日 ～2023年2月1日	スズメ1羽	2	26	0	0%	スズメ飛来の2回とも夕暮れの時、15分間以上木に留まったり採餌した。
2023年2月2日	スズメ1羽	0	7	2	29%	10:35-50:35分に本個体が木にいた。38分にスズメも木に、41分にスズメが地面へ、44分に本個体も地面へ移動したが、30秒後、スズメを追い出した。
2023年2月22日	アオジ1羽	6	6	0	0%	10:55-11:03: 55分に本個体は木にいた。57分にスズメも木へ、11:00に両種は地面へ採餌、03分に本個体はスズメを追いかけたが、スズメが地面に残った。
2023年2月23日	アオジ1羽	4	5	2	40%	木に留まったり地面で採餌。一時同時にいたが、たまたまと判断した。
2023年2月24日	アオジ1羽	1	5	0	0%	7:53-57: 一緒に木に留まったり地面で採餌したが、地面で採餌中、2回ほど本個体に追いかけられたが、アオジは地面に残った。
2023年2月25日	アオジ1羽	6	4	0	0%	9:38-40: アオジの近くで地面で採餌。
2023年2月26日	アオジ1羽	5	4	1	25%	アオジは木に留まったり地面で採餌したが、本個体が同時にいなかった。
2023年2月27日	アオジ1羽	4	5	0	0%	本個体とアオジが1日中数回飛来したが、同時にいることがなかった。
202年4月23日	アオジ1羽	0	4	1	25%	17:45-18:04: 本個体は18:02まで木に留まり、地面でアオジが採餌していた所へ降りたら、アオジがすぐ飛んで、本個体はしばらくそこで採餌。
2023年4月24日	アオジ1羽	1	1	0	0%	アオジは同時にいなかったが、8:19に本個体は地面で採餌、最後の観察となった。

表2. 続き

		合計	平均	
2022年12月30日 ～2023年1月3日	アオジ	15	6	40%
2023年1月4日 ～2023年1月13日	スズメ	54	12	22%
2023年1月4日 ～2023年1月6日	スズメ	22	7	32%
2023年1月11日 ～2023年1月13日	スズメ	19	1	5%
2023年2月22日 ～2023年2月27日	アオジ	29	3	10%

この期間にスズメと一緒にいる頻度がだんだん減少している。

表3. ミヤマシトドの日本における観察記録一覧。記録型と備考の「」内は、出典からの引用。(調べ内容およびリンクの閲覧確認は2024年1月17日現在。)

No.	日付	観察回数	記録型	観察者	出典	備考
1	1936年12月	千葉			日本鳥類目録, 第7版 (2012)	
	1936年12月	千葉県木更津		古川竜城	岡, 1972	
2	1964年3月	東京			日本鳥類目録, 第7版 (2012)	
	1964年3月9日	東京都西多摩郡		岡董高	岡, 1972	
3	1969年3月	北海道			日本鳥類目録, 第7版 (2012)	
	1969年3月	北海道尾岱沼 (別海町)			高野, 1982	
4	1975年2月	北海道		今井, 小沢	日本鳥類目録, 第7版 (2012)	
	1975年2月	北海道春別川河口 (別海町)			高田, 1991	
5	1977年4月	舳倉島			日本鳥類目録, 第7版 (2012)	
	1977年4月17日	舳倉島 (石川県輪島市)			Brazil, 1991	
6	1977年10月	舳倉島			日本鳥類目録, 第7版 (2012)	
	1977年10月	舳倉島			Brazil, 1991	
	1977年10月16日~17日	群馬県			(本書中の出典: 『舳倉島の鳥』石川野鳥の会, 1979)	
7	1977年10月	群馬県片品村	幼鳥		日本鳥類目録, 第7版 (2012)	秋渡り後の2番目に早い第一回冬羽と思われる記録。
	1977年10月14日	群馬県片品村			https://www.wbsj-gunma.org/mokurokuver1/mokurokuver1.4.pdf	
8	1985年4月	見島 (山口県萩市)	若鳥	竹中敏, 他	日本鳥類目録, 第7版 (2012)	
	1985年4月28日	見島			Strix Field Note, 1986, https://public.strix/05/Strix05_17.pdf	
9	1992年10月	石川			日本鳥類目録, 第7版 (2012)	
	1992年10月30日	石川県, 河北潟			「石川県の鳥類」日本野鳥の会石川支部, 1998	
10	1993年5月1日	飛鳥 (山形県酒田市)	成鳥	私市	「バーダー」1993年7月号, 文一総合出版, 東京	
11	1994年11月	埼玉	若鳥	浜尾章二	日本鳥類目録, 第7版 (2012)	
	1994年11月1日	埼玉県浦和市塚本の荒川河川			https://www.wbsj-saitama.org/kaihou/128_1994.12.pdf	
	1995年2月19日	埼玉県浦和市大久保農耕地	冬羽	西村ユージ	https://staring.dyndns.org/~ymishi/1995/950219.html	
	1995年冬	埼玉県浦和市大久保農耕地	成鳥		https://mtana2.exblog.jp/1805457/	11月から越冬した個体?
12	2000年4月	新潟			日本鳥類目録, 第7版 (2012)	
13	2000年4月	山形			日本鳥類目録, 第7版 (2012)	上記の12と同個体?
14	2003年1月	青森			日本鳥類目録, 第7版 (2012)	
	2003年2月	青森県八戸	第一回冬羽		『日本の野鳥』山と溪谷社, 2014	上記と同個体と思われる
15	2006年4月	兵庫			日本鳥類目録, 第7版 (2012)	
	2008年	愛媛県内重信川中流域の河川敷	第一回冬羽		https://www.city.saijo.ehime.jp/soshiki/citypromo/bird-210.html#5	越冬したとの記録
16	2008年3月10日 ~2008年4月6日	愛媛県松山市森松町	成鳥		http://home.384.jp/peregrine-falcon/1d3024.html	越冬した上記の個体?

表3. 続き

No. 日付	観察回数	記録型	観察者	出典	備考
17 2008年3月10日 ～2008年4月21日	神奈川県 神奈川県	第一回冬羽 →成鳥	伊藤宏美	「バーダー」2010年6月号, 文一総合出版, 東京	換羽観察記録
18 2011年5月5日	北海道利尻島	成鳥	田巻和広	田巻, 2012	
19 2013年4月21日	東京湾野鳥公園	成鳥	多数	E.g. http://kamaima.blog.fc2.com/blog-category-133.html	
20 2015年	愛媛県西条市河原津干拓の疎林			https://www.city.saijo.ehime.jp/soshiki/citypromo/bird-210.html#5	
21 2017年9月28日 ※観察日付未確認	さいたま市, 大久保農耕地	成鳥	佐藤進, 工藤雄司	https://www.youtube.com/watch?v=rPbjdm06bWk	鳴き声 (翌年3月) 越冬したとの記録
22 2020年1月15日, 19日 2020年2月3日	宮崎県一ツ瀬川河口周辺	第一回冬羽	WBSJ 宮崎県支部の 会員など	https://wbsjmiyazaki.wixsite.com/bird/post/初確認のミヤマシトドを撮りました! - 牧野田節子	
23 2020年4月15日	兵庫県	成鳥		https://blog.goo.ne.jp/5646q62goomatu/e/ae2efdf76cb98fa67038514d58ff743	
24 2020年10月13日	山形県酒田市飛鳥	第一回冬羽	Yann Muzika	https://ebird.org/species/whcspa/JP	秋季渡り後の一早い 第一回冬羽の記録
25 2022年4月21日	北海道札幌市	成鳥	(株) 技研工房	https://www.youtube.com/watch?v=ogtqxwJ2FNA	アトリ3~4羽とと一緒に餌台 で採餌
26 2022年12月30日 ～2023年4月24日	北海道網走市	第一回冬羽 →成鳥	著者本人による観察 城石一徹		越冬した

謝辞

本記録を取りまとめるにあたり、日本野鳥の会オホーツク支部長の川崎康弘氏には、多数の貴重な意見をいただき、本原稿の改良に大きく繋がったこと、また、同氏より私有地における希少種の情報公開に関して有益な助言をいただいたことにより、不特定多数の観察者による本個体への干渉を最小限に止めることで長期的な観察記録に至った。ここに感謝の意を表す。

引用文献

- BirdLife International. 2021. *Zonotrichia leucophrys*. The IUCN Red List of Threatened Species 2021: e.T22721088A136821496. <https://dx.doi.org/10.2305/IUCN.UK.2021-3.RLTS.T22721088A136821496.en>.
- Brazil MA. 1991. The Birds of Japan. Christopher Helm, London.
- Brazil M. 2018. Birds of Japan. Christopher Helm, London.
- DeWolfe BB. 1968. "*Zonotrichia leucophrys gambelii* (Nutall), Gambel's White-crowned Sparrow." In: Life histories of North American cardinals, grosbeaks, buntings, towhees, finches, sparrows, and allies., edited by Austin OL, 1324–1344. pt. 3: U.S. Natl. Mus. Bull. 237.
- 伊藤宏美. 2010. ミヤマシトド *Zonotrichia leucophrys* の換羽観察記録. *バーダー* 24(6): 52–53.
- 叶内拓哉, 阿部直哉, 上田秀雄. 2014. 新版日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京.
- 技研工房. 2022. 公式YouTubeチャンネル. 北海道の生き物観察より. <https://www.youtube.com/watch?v=ogtqxwJ2FNA>
- King JR. 1961. The Bioenergetics of Vernal Premigratory Fat Deposition in the White-crowned Sparrow. *Condor* 63: 128–142.
- 日本鳥学会. 2012. 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.
- 岡董高. 1972. 迷鳥ミヤマシトド本州確認について. 「鳥」21: 87–88.
- 佐藤進, 工藤雄司. 2017. 野鳥動画図鑑. YouTubeチャンネル. <https://www.youtube.com/watch?v=rPbjdm06bWk>

- 高田勝. 1991. 根室支庁管内鳥類リスト. 根室市博物館開設準備室紀要 5: 1–19.
- 高野伸二, 叶内拓哉, 森岡照明. 1982. カラー写真による日本産鳥類図鑑 (初版第2印刷). 東海大学出版会, 東京.
- 田牧和弘. 2012. 利尻島における鳥類の新分布の記録 (2010-2011年). *利尻研究* 31: 27–29.